飯田武郷傳記

服部文庫
イ 17
2314

117 特
2314

服部文庫

飯田武郷は信濃國諏訪の産なり家世々高嶋藩主諏訪侯に仕ふ父を小十郎武敏と曰ひ母は飯嶋氏てい子といふ六歳の時父武敏殺し兄裏安仁孝天皇の文政十年丁亥十二月六日江戸芝金杉将監橋諏訪藩邸に生る（二〇八七年）

後家を續ぐ裏安に子なかりしかば武郷（十二歳の四月）其の養子となる

江戸の藩邸に居りし頃十一歳の正月（天保八年丙申正月）芙蓉館の門に入り漢學を服部元淵に受く

翌年（天保）十四年癸卯正月始めて国語を学び
陽に住き岡村清水片羽等の地に住せり。二十歳
の時本居宣長翁の著書を読み大に感じたるも
ありて初めて古典学に志し又海野遊翁の門に入
り和歌を詠み習ひ（同藩の千野方義、十年岳中主水定保
藤は和歌の友なり）
孝明天皇の嘉永（三年庚戌）五年壬子（秋、宣長大翁の弟江戸に行き立野銀次郎の角律所に教へ
法に因し有益なる大和清水諸先生を訪ひて和歌の道を研究す。）日本書紀の註解書を
著さんを思ひ立ち始めて執しぬ。されど遂に畢生
の大事業を企てし最初なりき。されば年二十三歳
なりの翌年二月先づ伊勢神宮に参拝し荒木田久

守翁を訪ひて古学につきて意見を述ぶ。久守翁
その志を同うせるを悦び互に斯道のために尽さ
ん事を約す。それより大坂に遊び浮路大和地方
の京畿の地理を探り遂に皇居を拝し東海道
を経、遠州浜松より信濃甲斐に入り四月下旬江
戸に帰る。
翌年二月晦日父と共に江戸に行き三月五日到
着せり。同十五日中小性を命せられ矢倉の藩邸
に住す。
同四年丁巳正月二十四日家族を携へて江戸に

帰る甲斐國駒飼沢にて祖母急病にて死す依り
て養真寺に葬り二月三日西京に著き裏町なる
三輪悌充の宅を借りて住む
此の花岡村に移居す
是より先安政元年甲寅三月幕府北米合衆國と外交條
約を假訂せ―かば尊王攘夷の論漸く諸国に
起り天下の志士京都に集合す而して明治維新王政
復古の主動者は実に岩倉具視公なり公は当時

明治維新の大業は孝明天皇の安政元年甲寅三
月北米合衆國と外交條約を假訂したるの頃に
胚胎し尊王攘夷の論漸次国内に起り天下の志
士漸次京都に集合す彼の維新大業の主動者な
る岩倉具視公は常時公武合體論者たるの故を以
て文久二年七月勅勘を蒙り九月に至りて洛外
岩倉村に追はれしかども密に皇綱を挽回せん
事を謀り西郷大久保木戸小松(桂)(常時桂)等と謀議
を通じ陰に諸藩勤王の志士を鼓舞せり王政復
古の業已に此の時に完備せり而して幕府一人

し之を知る者無かりしなり

此の頃間国学者間に亦勤王論を主張する者漸次勃興ナ武郷し亦感憤蹶起大に為すあらんとし慶應三年丁卯三月十九日家督を長男武夫に譲り隠居して時機の至るを待ちたりき

戸を擾乱し次で関東地方を攪拌し幕府の激怒を促し戦端を開かしめ虚に乗じて徐に勅旨を貫行せんとす。

武郷之を同志武蔵国入間郡の産權田直助及び落合直亮等と遥に隆盛に應じ同志を糾合

して数百人を得たり

時に幕府の旗下酒井金之助の部下に小島四郎将満といふ者あり慷慨にして勤王の志篤し衆乃ち将満を推して總監とし直亮を副監と為し大に奮起せんとす。将満は相良總三（又牡三に作る）直亮は水原一郎と変名す。

総三直に諏訪に來り武郷等と相謀り本営を下諏訪に置き志士の分擔を定め江戸に帰り直助直亮等と三田の薩邸に屯集し豫定の部署に就く。既にして総三高島藩志士の総代一人を派

上之を知る者無かりしなり

慶應三年十二月是の年三月二十九日勅許ありて公入洛し大に志士と王政復古の實行を計畫す。明治天皇御即位まし〳〵て十月討幕の密勅薩長両藩に下る是に於て西郷隆盛等相謀り先つ江戸を擾乱し次で関東地方を攪拌し幕府の激怒を促し戰端を開かしめ虚に乘じて徐に勅旨を實行せんとす。

武郷之を聞き同志武藏国入間郡の産權田直助及び落合直亮等と遥に隆盛に應じ同志を糾合して數百人を得たり

時に幕府の旗下酒井金之助の部下に小島四郎將満といふ者あり慷慨にして勤王の志篤し衆乃ち將満を推して總監となし直亮を副監と為し大に奮起せんとす。將満は相良總三（又壯三に作る）直亮は水原一郎と変名す。

總三直に諏訪に來り武卿等と相謀り本營を下諏訪に置き志士の分擔を定め江戸に帰り直助直亮等と共に三田の薩邸に屯集し豫定の部署に就く。既にして總三高島藩志士の総代一人を派

10 20 備文堂印行

遣せん事を要求せしかば武御衆と議し石城一作を推す一作感激之を快諾す祖道の席上一作詩を賦す曰はく

男兒決志豈徒然　欲挽皇威掃賊氛
唾手乘時方此際　縱　踏破八州雲

武御國風一首を贈る

唐人が別れし水の心さへ
汲みて知らるゝこの夕かな

一作亦往きて薩卿に投ず一日一作同志と郊外目黒村に遊び菊花を賞せんとあて村の一十亭

に登り鞍馬食遂に村人と爭鬪し村吏某を斬る挙村騒擾す蓋し皆豫定する所の行為たり偶幕吏の捕ふる所となり拉し去りて傳馬町の獄舍に投じ糾責甚たはなはだしきも一作の懷にする所の短冊を獲て守人と署名せる追窮し深其の同志なるかを疑ひ追窮する事あり然れども遂に守人は武御の通称なる事を知るに及はざりきと雖も無くして一作獄中に死せり蓋し幕吏の毒殺せられたるなり

十一月

十月総三の急使諏訪に來り一作の獄死を報

更に急に一人を差遣せん事を求む。曰はく能
じ神奇特南等の薩邸に集まる者を
ふべくんば君自ら來れと則ち直に衆を舎して
岡村の自宅に密談す時に岩波廣之助自ら其の
任に當らん事を乞ひ且つ曰はく君は宜しく京
都に上り其の動静を視察し是に於いて
急遽旅装を整へ岩波廣之助は江戸に武卿は京都に
発足せり（し東西氣脈を通じ動主の旗を掲げ相呼応して幕府を倒すべしと）

一作は高島藩の儒者にして東山と號せり其
の詩文東山遺稿に收めたり

総三等の薩邸に拉ぜし時薩藩の士多くは帰

猶詳に江戸べし

一左下げ

國し只益満休之助、伊牟田尚平、関太郎、児玉雄一
郎、篠崎彦十郎等数十人に過ぎず直助は西郷等
が約束の兵員を送らざるにより遷延機を失は
ん事を憾とし密に藩邸を脱して急遽京都に
上り有志と凝議尽力する所ありき総三等休
之助等と謀り夜々市民を暴掠し人心を動揺
せしめ十一月二十二日先づ密に火を放ちて江戸
城の牙営を焼きぬ更に別隊を甲斐下野相模に
派し四邊を騒擾せしめ幕府の鎮定の兵を出
すの虚に乗じ江戸城を略せんとす。十二月二

十三日嶋津氏の同族佐土原藩の志士等、江戸市中廻り酒井左衛門尉忠篤（今の伯爵家）の屯営を襲ひ番兵を銃撃す是に於いて幕府遂に意を決し庄内、上山、龍野、鯖江の諸藩及び別手組新撰組に命じ二十五日拂曉を以て先づ薩邸を砲撃す冬煙天を覆ひ殺傷十数名然三等殘徒数十人と共を突いて逃れ藩船胡蝶丸に乗じ神戸に向ふ因陽艦将榎本武揚追撃す砲弾船腹を穿ち檣折れ檝挫く辛うじて脱せしかども更に暴風に遭遇して八丈島に漂流し遂

に紀伊国丸亀浦に上陸し昼夜兼行伊勢大和を経て京に入らんとす通せず宇治に迂回して僅に達するを得たり時恰も伏見鳥羽の兵禁を望見す実に明治元年戊辰正月三日なり翌日隆盛に面し関東の情況を告ぐ隆盛欣び労して云はく幕府の滅亡既に近日に迫れり嗚呼快なる哉と諸君周旋の功空しからず遂に今日の快戰を見る

武郷の京都に到著せしは慶應三年十二月なり偶〻權田直助に邂逅し共に共食に接近し又五條高高松家に出入す征夷大將軍德川慶喜は去る十月十四日遂に大

政を奉還せしが(松平容保)二條城に在り慶喜を擁して大坂城に走る(注松平容保儀京都守護職たり時に迄洋京に走り本国の用)会津藩委任二藩の(兵士)の宮門警衛を撤せしめ其の人京を去し藩士の兵士を以て之に代らしめ慶喜を二條城より逐ひ且つ京都守護職会津藩主松平容保を京都より放たんとす茲に於て容保遂に慶喜を擁して大坂城に走る

会津藩主松平容保京都守護職たり武郷其の姻戚松田氏を訪ふに託して守護職邸に入り其の動静を窺ふに未だ何事をも豫知せざる者の如

し更に幕吏の風を装ひて二條城の正門より入る衛兵敢へて誰何せずと雖内外の形勢甚だ殺氣を帯ぶ偶従者平五郎言を発するに信濃の訛音あり警戒の幕府力を拔いて集り迫り平五郎を縛し之を倒にして傍の井中に投ぜんとす武郷身を以て脱れ去り己が旅舎に投じ且つ憂ひ且つ懼れ煩悶措かず夜半に及ぶ比門を叩きて武郷の在否を問ふ者あり曰ふ平五郎帰れ来れりと則ち狂喜出で迎へ其の恙無かりしを賀す平五郎曰はく僕先生の健在を意外とせり往の

幕兵等僕を拉し去り倒に井中に吊し将に弄殺せんとせり時に一老人來り制止して云はく之を縱て敢へて軽挙を恣にする事勿れと僕之に由りて身を全うして還り幸に先生を見る事を得豈希有の奇蹟に非ずやと是に於て相賀して杯を挙げ夜を徹せり

幾も無くして薩藝土の兵稍々京師に入り會津桑名の兵を逐ひ其の入京を禁ぜしかば容保遂に喜を擁して大坂城に走り武徳狂喜之を同志に報告し且つ將来の行動を策せんと欲し晝夜

外とす彼の幕兵等僕を拉し去り倒に井中に吊し將に弄殺せんとせり時に一老人來り制止して曰はく之を縱て敢へて無辜の粉骨を敢へてす軽挙をなすなかれと僕是に由りて身を全うし還りて先生を見る事を得たり豈希有の天佑に非ずやと是に於て相賀して夜を徹せり

十月十四日征夷大將軍徳川慶喜辞官を奏す松平容保桑名を撤し大坂城に走る藝土二藩の兵のみ京師を撤せしめ其の入京を禁ず藝土の兵を以て之を代らしむ元年戊辰

徳川幕府の瓦解は実に一瞬間に瓦解したるの
概あり（其の消息）
京都に走せ諜計の同志に報せんと欲し
昼夜兼行して（月の廿八日頃）に著し先づ家門を伺ふに屋内頃
る騒然たるの状あるを以為へらく我が事露現し
て幕吏の家宅を捜索する者に訛ずやと密に屋
後より探偵するに親戚故舊の在るのみ則ち戸を排
して入れば家人驚き見る曰はく官軍先鋒高松公子
将に江戸に下らんとし此の地を過ぐ（決子）永夫徴発
に應じて今夜光足せんとするありと是に於て
旅装を解きて悉く（永）武夫に與へて出発せしめ直

に勤王堂を呼び（集し）京都の実情を談る衆驚喜して
益奮励せん事を期せり
慶應四年（明治元年）戊辰正月三日夜半武卿を連
呼する者あり誰何すれは岩波連之助（其人）の數創を
被りて入る同志の医大山を招きて療治せしめ
岩波曰はく臘月二十五日薩邸砲撃を蒙り（薩）残兵合
直亮等残徒百餘人と囲を突いて（抜）れ（薩）薩船胡
蝶丸に乗して迫る（時に）余（十年）舊戰數創を被り氣息奄々
品川湾に走りし頃船既に纜を解けり止む事を
得ず單身東海道を下り昼は山林中に伏し夜々

向行して富士川に達し衣を濯き創を洗ひ身延山の信者に扮して甲府を過ぐる甲斐吏の捕ふる所となりしが夜み無じ縛を解きて逃れ来れるなりと

征夷大将軍徳川慶喜去

徳川幕府既に亡び殘徒なほ四方に跳梁して朝命に服せざるに於て東西征討の師興れり

相良藩の榊原式部大輔征討大将軍仁和寺宮（嘉彰親王）を奉じ二藩従して大坂を訪ふ是その四日なり

陸奥十藩従て姫路に集まる

しか東征総督方栖川宮熾仁親王国を立ち強久を手に中山道を東し北陸を下る

10 (備文堂印行

是の日官軍先鋒と称して甲信地方の勤王党を徴發せらるるに公卿小滋野井公壽鷲尾隆聚高松實村綾小路俊実の四公子あり是により甲信地方の勤王党大に振ひしが其の部下に攘夷論を主唱する者盛に起り勤王の名を衝き攘夷の挙を遂行せんとの企あり此の事朝廷に聞えければ高松公を以て嫌く京都に召還されるに至れり

武蔵より東山道を都に上り
相良治三郎立大坂を発し官軍先鋒と為し中山
道を経て京の街衢に著し附近十落れ檄
を勤王の士を募集す士の文に曰はく

10 20 備文堂印行

忠勤可致、其他草莽たり共、勤王の輩は、御人数
に加り盡力可致様、勅捷之事

官軍先鋒

相良総三

正月廿六日、七日、名知川泊、廿八日醒井泊り

鎮撫総督岩倉太夫

具綱(ナリ)

具定(ナリ)成(ナリ)

同副総督岩倉八千代丸

変乱世の習として此の如き時機に投じ勤王の
何物たるかを辨せざる無頼漢或い博徒等
て競ひ集りて乱暴狼籍を事とし濫りに徴発

を恣にしたれば不平の聲漸く遠近に擴りぬ。
後者岩倉公は真綱を木曾路を進み塩尻に宿泊せられた
る時彼等の不法を耳にし豊橋より相良を呼
び寄せて之を詰責せり相良は始めて部下に
誘られたるを知り悔すれども及ばず素然
として自ら責を引き潔く命を待つ。公涙を拂
ひて之を斬り其の首を梟して下諏訪に無頼
漢を懲す。天音龍太郎相良の罪狀を宣告した
るは實に三月二日なりしの時なり。大音は滅
ケ嶽の裾なる関守なる安井息軒の門人にし

て菱陀と称する学者なり彦根藩の参謀となり後岩倉鼻縣知事に任せらる。後に至りて相良
を罰したる事を悔ゆ。最後に西郷隆盛に大に
憚したるゴ大久保公に忌まれ獄に下さる。
其の後總督府執事の命各藩に下したる書面
高松殿京師御脱走にて人數被召連東國へ御
下向之趣。右は決して
勅命を以御差向に相成候儀には無之全く無
頼の奸徒幼稚の公達を欺き奪ひ出し奉り候
儀と被察候。右無頼の者共當総督様の先鋒抔

と偽り通行の道に金穀を貪り其他如何様之
狼籍可有之哉し難計候に付、諸藩何れし此旨
篤と相心得右等の徒に欺れ不申様可仕候。尤
公達に於ては卒忽之儀無之様可仕候へ共、人
數之儀は夫々取押へ置　総督御下向之上御
處置相伺候様可仕旨御決決之事
附、先達而綾小路殿御手に属し居候人数、綾
小路殿已に御帰京相成候後右之者共無頼
之徒を相語合官軍の名を偽り嘯導隊杯と
唱虚喝を以農商を劫し追々東下致候趣に

相聞候右等も高松殿人數同様に候間夫々
取押一置可申旨被　仰出候事

総督府執事

堀左衛門尉殿
内藤若狭守殿
諏訪因幡守殿
松平丹波守殿
松平伊賀守殿
真田信濃守殿
堀内蔵之頭殿

牧野遠江守殿

内藤志摩守殿

右御重職中

但而刻付を以て急に御廻達可被成候也

但止りし藩より総督府本陣へ可相返候

武御は再び上京都に在りて未だ其の変事を知らず偶
倉沢伯耆駆せ往きて之れを武御に告ぐ武御愕然
然曰禍の己が身に及ばん事を畏れ憂はず叫び
て云はく意外々々人生は其れ夢の如しと直
に容姿を変じ髪を剃除の人の如くし片鬢片眉て
姉小路下る麩屋町枡屋に投ず枡屋は信州伊那
人の定宿する旅館なり。意に謂へらく危い哉意
余にして諏訪に在らば亦既に梟首せられしな
らん落合権田は陳に在り恐らくは斬に処せ
られ了るあきを得んやと沈思之を久し

うすの時二客の来り投ずる者あり之を伺へは落合權田なり「二氏は逆鬼に非ずや若し然りば直ちに生命を全うして来れ」二氏下諏訪の変事を知れりや「未だ」「亳も知る所なし」「相良ハ岩倉公に斬られぬ」二人囂驚落膽腰起つ事能はず既にして土肥典膳の邸を借りて身を潜む岩倉公の使者武御雷長盛[illegible]知[illegible]召す「撃を見て来れ」と落合權田坐に在りて曰はく公召して一人毎に斬るなり「今待未だ召されさる」の先に脱すべし「撃ち急に去る」と輒ち急に去る逃げ

武御雷隊時を経過す京都の探偵林魯平の部下邸外を警護する事頗る厳なり典膳累の及ばん事を恐れ武御雷に他に移転すべきを迫る依りて倉澤の楠公會社の借家一室に匿る探偵まく包囲し倉澤を時に呼び出して尋問する事あり家主伊勢久亦武御雷倉澤の居を居く事を拒絶す倉澤一計を案出し京都市中取締高須某に乞ひ其の許諾を得て其の門に掲げ「高須家人」の四字を以てすこれにより探偵復た附近を伺はざるに至れり

建議

岩倉公の事務に在り常に落合權田飯田の三人を招き歴史法制等に係る調査を託し事毎に諮詢せり胸襟を開きて其の所信を陳べ遂に其の事無し朝議攘夷の令を停められ又列藩戦功を誇り朝威を凌くの間あり加之相良を斬りて梟首せしむ三人之を思へば疑念頻りに生じ公の為す所往々首日に矛所す再思すれハ憤慨に堪へざる者あり是に於て相謀りて曰ハく徒らに禍災を被ら人ゟは進みて之を刺すに若かず然らずんハ相良も亦余等

1020 佛文堂印行

を怨みんのみと。倉澤壁を隔てゝ之を聞き大に驚き為す所を知らず乃ち馳せて之を西川善六に謀る

西川善六は近江國八幡の豪商なり彦根藩を勤王堂と為し、し其の力多きに居る文久三年二月足利尊氏の木像を斬りし事件の参謀者にして其の資産を以勤王の為に費消したり福羽子爵嘗て其の食客となりし事あり善六曰はく我に成算あり決して憂慮するを須ひずと。是に於て善六岩倉公に赴き具に彼の顛

末を告ぐ。越えて西三日、岩倉公落合権田等を召す。二人曰はく、時機を伺ひ公を刺さんとして公の余等を招くはこれ天佑といふべし。今日の事公を殺して後に自殺せんのみ。と。松枝日余等を殺さんとして召す。乃ち各白布一段を以て腹部を巻き腕を扼して公の邸に赴き執事に就きて刺を通ず。執事云はく直に公の室に入れと。二人眼を左右に配つて四面闃として声なし。入りて公を見る。公特に刀を解いて坐す。公徐に曰ふ、公事多端の故を以て君等切見さる事久し。我関東の情況を問かんと欲するや切なり。請ふ近つきて坐せよと。二人膝を落し敢へて近つく事能はず。口を噤みて坐す。公曰はく何ぞ卿等我を疑ひ将に暗殺せんとすと。真か二人戦慄黙然たり。公曰はく卿等黙して言はざるは正に余を疑ふの證なり。彼の相良の事昨夜詳に之を聴けり。我豈に一掬の涙を濺かざるを得んや。今甚だ悔ゆれども及はざるなり。然りと雖も相良の部下澀に徴発を事とし乱暴狼藉至らざる無し。尾張藩に諸藩皆不平を訴ふ。是

1020 備文堂印行

に於て已む事を得ずして之を斬らしめたり。軍官軍の先鋒役の如きの所業に出では人呼んで国賊と曰ふと雖も誰か能く辯疏するを得ん且つ事施いて統督府の威信に関する是を以て涙を揮ふて之を刑せるのみ。而して果を卿等に及ぼすの理決して之あるべき事無し。請ふ今より以往寺町の下陣を以て卿等か居に充てん迚に移り住て頼た時して

余か為に事を執れと。依て人毎に力勉及む金品を与て其の労を慰めたり

据置勉再ひ公の為に奔走するに至りぬ

一説に云ふ是の時公に招かれたるは落合直亮と齋藤貞之助（落合春雄又科野東一郎の二人ありといふ）

此の間武郷の公に建議したる事種々あるも中に

元年方白川神社仮家学館ニ明治元年十月安政元年創建皇子所内用掛年俸三十石藩士人扶持十年十月二年六月帰藩皇子名極五年一月廃藩ノ時マデ

同年　月　日神佛混淆を禁ずるの令出づるに及び諸國の社僧皆還俗して神官となり遽に神典を研究すべき必要を生ず

南都の新神官の聘に応じて始めて古典の講筵を奈良に開くされらの神官は九條公子（同大乘院門跡）近衛公子（同一條院門跡）を始め諸大夫等、公卿縉紳の流若しくハ諸大夫、侍、北面の人々なりき。

同十二月京都大學創建せらるゝに及び召されて皇學所御用掛を命せられ（九年情三年右を除く）当藩主されを辞す

二月東京ニ大学校開設セラル

て大に藩の名誉と為し其の脱藩の事を咎めず特に五人扶持を加増すの聖明内二年高島藩も亦諸藩に倣ひて学校を建て皇学所を設け武郷を召還して皇学教授とす（六月京都皇学所御用掛を免ぜられ八月藩に帰りて任に就く）

是年二月東京に大学校開設せられ二男永夫藩の貢進生として大学南校に入る

明治五年正月藩廢せられ皇学教授所亦罷む（三月十五日）

専ら著述に従事せしが翌年教部省の命に応じ

1020 備文堂印行

十六年七月二十日 宍倉公薨

氣比神社宮司に任じ兼権大講義に補せらる十二月八日賀茂神社宮司に轉じ七年八月八日諏訪神社權宮司に八年四月十四日浅間神社權宮司に轉ず。九年四月六日官を辞す。七月大教院の聘に應じて講師となり十二月八日大講義に補せらる。十一年十一月二十日大講義を辞し二十九日太政官修史館御用掛を命ぜらる。十二年十二月六等官記に任せらる。十四年八月十三日東京大学助教授に任せられ兼ねて修史館事務に勤む。十九年三月非職となる此に年六十なり

同二十年五月八日嘗て共に国事に奔走せし
權田直助歿す年七十九歳なり後四十年五月
二十七日特旨を以て正五位を贈られしなり
同二十一年十二月皇典講究所講師となり二十
三年国学院講師を兼ぬ翌年二月慶応義塾大学
部教師となり二十六年冬神宮教校教授となり
二十九年一月帝国文科大学講師を命ぜらるの
元を[宜][在][る][ず]に就くや昼は公事に鞅掌し夜は著述に
従事し[孜々]として眠食を忘るゝに至る故[牛]を[飲]して[ル]眼疾を発
し将に明を失はんとす遂に医師の勧告により

三十年九月大学講師を辞し徐に治療を加ふ然
るに病をなすみて著述の事を棄てず研究考察
する事四十八年間にして明治三十二年已亥の
春終に其[日本書紀]の稿を脱し病床に最後の校閲を完了
す総べて七十卷紙数七千五百枚に及ぶ名つけ
て日本書紀通釋と云ふ時に年七十三歳なり

[illegible]先
[illegible]
の二人は[illegible]
[illegible]内[illegible]
[illegible]

[illegible]良友会[illegible]ナリ[illegible]所作[illegible]本特[illegible]任私

寺[illegible]素彰親王に扈従して大坂に赴き尋いて
四国中国鎮撫使四條五條両卿に陪従して
[illegible]行[illegible]走盡力中更に岩倉公の内命を
帯び東海江戸の内情を偵察し十月十日発途
の風姿を装ひ二月十日夜兼行十三日
にして江戸に下り[illegible]を賭し[illegible]
日帰京復命す公大に之を労し直亮に八金壱
萬匹を直助ふ大小刀を贈りて[illegible]を賞せ
り。信州伊那郡小野の富豪倉澤義[illegible]に京都に
在り温厚篤實にして勤王の志[illegible]神祇伯白

川家に仕へ（出勤し）て竊に天下勤王の志士を援助す落合權田の東下するや遂く其の旅費を支給して惜む事なし二人ハ故に仲山道を下り

翁の小野の家に過りて江戸に下れり

武郷は夫ほ京都に止りて醍醐倉の定めに出入して、歴史故典の諮詢に應じ倉澤と相往來してハ志士を糾合せり。武郷の從者となりて常に忠實に運動したるは同じ藩士の新人（荻屋壮平五郎）まさりの（良）相樂（始め）の手先となりて木曽に赴き飛騨地方の軍

隊を徴発せんとせしの武郷の上京せるを聞き慕ひて之を追ひ奔走大に勉めたり

○相樂の詠歌を將滿詠草を書記したるハ去の人なりとなり維新の後淡路口伊弉諾神社宮司に任ぜらる

慶應三年十月四日征夷大將軍德川慶喜公大政を奉還し（松平容保慶喜を擁し事件に就き大坂城に移る。越えて十二月京都に赴いて薩藩と相津藩との衝突を生じ（会津藩の京都警衛を撤せしめ人心を鎮せんとせり）

して数百人を得たり。初め薩摩藩の勤王論を主張する者漸次の方延に久の向国学者間に勤王論を主張す

是の時先、幕府の旗下酒井金之助の部下に小嶋

四郎将満といふ者あり慷慨奮起赤心を尽さ

東奔西走大に勤王論を主張せり是に至り将満

を推して總監と為し直亮を副監と為す。将満ハ相

良總三(又壮三に作る)と假名し直亮ハ水原一郎

と假名す。

総三先づ諏訪藩に来り武御雷等と相謀り遂に其

の本営を下諏訪に置き諸士の郷士所を部署し

て江戸に往き、直助直亮等と三田の薩邸に屯集

し予定の計画を立てる藩主請

同年十一月薩邸江戸相良より急使來る曰はく
諏訪の志士石城一作獄に死せり依りて更に急
に志士一人を差遣せよ。能ふ可くんば君自ら來
れと是に於て寧ろ有志を集め岡村ある自宅に集めて
密議す岩波連之助自ら其の任に當らんと乞ふ
且つ曰はく君ハ宜しく京都に上り其の動靜を
視察せよと是に於て急遽旅裝を整む岩波は江
戸に武郷は京都に発足す

石垣一作小高島藩の儒者なり平素尊王論を
主張せり(嘉永)初め相良集の江戸に赴きて薩邸に

叫屯集す。や更に一人を派遣せん事を要求し
来る志士相謀りて一作を推す一作踊躍して
之を快諾す祖道の席上一作詩を賦して曰はく
男兒決志豈徒然　欲挽皇威掃賊氛
唾手秉時方此際　縱横八州雲
武郷國風一首を贈る
唐人が別れし水の心さへ
汲みて知らるゝ此の夕かな
一作赤往きて薩邸に投ず慶應三年九月一作
同志と目黒に遊び菊花を賞せんとし一小亭

[illegible]

鎮定の計畫を遂行せ[illegible]
の時に薩藩の士多くハ帰國し只関太郎、児玉
雄一郎、篠崎彦十郎等數十名に過ぎず益満休
之助、伊牟田尚平、一郎(直亮)休之助等と謀り夜
々市街を暴掠し人心を騒動せしめ十一月二
十二日密に火を放ちて江戸城の牙営を焼き
更に別隊を甲斐下野相模に流し四邊を騒擾
せしめ幕府の鎮定の兵を出すの虚に乗して
江戸城を略せんとす十二月二十三日鳴津氏
の同族佐土原藩の志士等、江戸市中廻酒井左

[illegible]

衛門尉(忠篤)(今の伯爵家)の屯營を襲ひ番兵を銃撃
す(二十四日拂暁)幕府意を決して終に庄内、上の山、龍野、鶴江
の諸藩及び別手組、新撰組に命じて薩邸先づ
を砲撃す炎煙天を覆ひ傷殺数十名(直亮等残徒)
人と囲を突いて逃れ藩船胡蝶丸に乗し神戸に
向ふ田陽艦将榎本武揚追撃す砲弾船腹を穿
ち帆檣折れ檣挫けて辛うして脱せしかども更に
暴風に遭ひ八丈島に漂流し遂に純伊国丸竜津
に上陸し伊勢大和を経て晝夜兼行京に入り
人とす通ぜず宇治に汗囲して僅に達するを

得たり時恰し伏見鳥羽の兵禍を望見す実に
明治元年戊辰正月三日なり翌日隆盛に面し
関東の情況を告く隆盛欣然はく幕府の
滅亡既に近日に迫れり嗚呼快哉哉と
三人の江戸に赴くや武郷は京都に止り其の地
の情況を偵察し東西氣脉を通じ勤王の旗を挙
け相呼應して幕府を倒さん事を約す上京する
や友ぶ直助直亮両人に邂逅し(密に共に)共人の照明に依
て岩倉公に接近す又五條家高松家に出入す
○相楽落合権田等り征東大将軍仁和寺宮

兼行諏訪に帰る

慶應四年(明治元年)正月鳥羽伏見の戰爭あり。土
ル戊辰戰爭の発端なり。

正月二日。前征東大将軍徳川慶喜大坂城を発
し京都に入らんとす松平容保(會津)松平定猷
(桑名)以下兵二万を率ゐて之に從ふ朝廷乃チ
薩長二藩に命じ伏見鳥羽の二道を扼せしむ
四日賊軍支へ兼ねて退きて淀城に入り尋いで大
敗す。旧幕府既に全く瓦解せしかども残徒は
は四方に逃竄して朝命に服せず是に於いて

旧幕軍大敗せり。

東西征討の師興れり。
絲三、直亮、真助等ハ其の時征討大將軍仁和寺宮
（嘉彰親王）に扈從して大坂城に赴き尋

本藉　父母　産地
漢学
古典学
和学
日本紀記形
伊勢矢吉　神皇正
学説論
岩倉公　西ヒオ
明治天皇の即位
三月十五日
三月十九日　公勅許入洛

安政元
慶応三

慶應四年 明治元 二十八

十月 密勅

小島將監

志士の奔走。（小島推問の形合）

石坂一作

岩倉廣之助

武力上京

（十月 前の敵 摩達 ロ）

（十二月 摩ロ）

（ロ）

（イ）

（ハ）

摩宅。

（西上京）

藤夫 文化 多度 抵

廣之助 迎ひ来る

鳥羽伏見

（徳川 慶喜）

支軍進発

先鋒隊の公子

西上京

1020 備文堂印行